



究極の優しさは

佐渡総合教育センター所長 宮川 安 則

答え。それは、「あいさつ」です。あの震災以来人と人とのつながり、優しさの大切さを私達日本人は真剣に考え、そして日常生活のありとあらゆる場面でそのことを意識した取組を実行しています。

さて、ここで私たちが普段日常生活の中で使っている「あいさつ」の言葉をあげてみます。朝は、①「おはようございます」。食事の時は、②「いただきます」③「ごちそうさまでした」。出かける時は、④「行って来ます」、⑤「行ってらっしゃい」。帰ってくると、⑥「ただいま」、⑦「お帰りなさい」。そして寝るときは、⑧「お休みなさい」。これに、⑨「こんにちは」、⑩「さようなら」を入れてちょうど10になります。

皆さんは、日常生活の中でどれくらいの「あいさつ」をしていますか。それぞれが静かに振り返ってみてください。

「あいさつ」は、「挨拶」と書きます。「挨」は開くという意味で、「拶」は迫るという意味です。もっと古く語源をたどれば、「挨」は押すであり、「拶」は押し返すことです。つまり、心を開いて相手に進んでいくのが「挨拶」であり、それを必ず返すのも「挨拶」なのです。

間もなく各中学校区で、挨拶運動が始まります。形だけでなく、相手が心底喜ぶような心を込めた運動を展開してほしいと思います。

たかが挨拶、されど挨拶。「究極の優しさ」＝「挨拶」を学校で、家庭で、そして社会全体で広めていこうではありませんか。

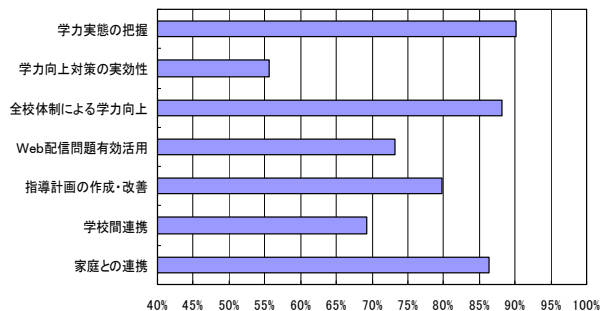
「隗よりはじめよ」という諺もあります。まず、自分から、明るく爽やかに大きな声で、「おはようございます！」が1日の始まりです。

授業改善と家庭学習習慣の確立

下越教育事務所 指導主事 本間 健 人

2回目の学校訪問が10月から始まりました。1回目の学校訪問では次の成果が見られました。「分かる授業」の実現のため、各学校では、授業と関連付けた課題を工夫する、家庭学習の取組を授業で点検・指導する、個別指導を行う、家庭学習が習慣化するよう家庭と連携した学習習慣の確立を図る等、実態に応じた取組を実施していることが分かりました。

指導主事による見取りの結果



【下越教育事務所管内の実態「教育下越218号より」】

9月7日に開催された総合教育センター主催の「課題解決研修講座」で『家庭学習の習慣化』について話をした通り、家庭学習の目標時間等の量的な面では成果が表れていますが、質の面ではまだ改善の余地があります。例えば、「単なる宿題ではなく、自主学習では学ぶ課題を与えたり選択制にする」等が考えられます。

学力向上の取組では、学力向上策の実効性に課題が見られました。授業改善の方策の実効性を高めるには、

- ①方策を具体的に設定する。
- ②授業改善の方策に基づいて単元や本時を構想する。
- ③方策を受けた授業実践を行う。
- ④方策に焦点付けて協議する。
- ⑤方策を修正する。

授業改善の方策と対応した指導案の作成と授業実践に取り組まれることを期待します。

3つの学力を高める学校

指導主事 香遠 正浩

市内小・中学校の研究主題は様々ですが、キーワードに着目すると3つに分類できます。

ア 「基礎・基本」「分かる・できる」「教えて考えさせる」「個に応じた指導」

イ 「筋道立てて考える」「考えを深める」「伝え合い」「表現力」「判断・表現」「活用」「確かな学力」

ウ 「自ら学ぶ」「学習習慣」「かかわり合い」「学び合い」「主体的」「学習意欲」「学ぶ楽しさ」

アの類型は**基礎的・基本的な知識・技能**、イの類型は**思考力・判断力・表現力**、ウの類型は**主体的に学習に取り組む態度**の内容です。ア、イ、ウは**学力の3要素**です。学校によって、焦点化した学力を高めようとしています。

今年度、管内7校から訪問要請があり、授業を参観させていただいています。七浦小学校では、アの基礎的・基本的な知識・技能を習得させる日々の指導を踏まえ、イとウの学力を高める指導法を研修しています。近藤浩子教諭は第4学年わり算単元の活用場面で、異なる数字を用いて $\square\square \div \square = \square\square \cdots \square$ を完成させる虫食い算に挑戦させました。A男は $86 \div 7$ で試してみました。2が2回使われるので、一の位の6を違う数に変えればよいと考え、7、8、9と入れ換えて完成させました。これは、イの見通しをもち筋道を立てて考えている姿です。ウの自ら学び自ら考える姿でもあります。

$$\begin{array}{r} 12 \cdots 2 \\ 7 \overline{) 86} \end{array} \rightarrow 87 \rightarrow 88 \rightarrow 7 \overline{) 89}$$



同校の複式学級では直間指導を行っているため、自主的に学習を進める子どもの育成にも力を入れています。

11月25日の複式学習指導研究会では、「知識や技能を習得させる授業」と「活用場面で自主的に学習を進め、数学的な考え方を高める授業」が直間指導により同時に提案されます。

自校の教育課程を見直す時機

管理主事 羽二生 裕

島内の小・中学校では「文化祭」を迎える時期となりました。



文化祭は、子どもたちの学習活動の発表の場であるとともに、学校文化を保護者や地域の皆様に発信し、「地域とともに歩む特色ある学校づくり」を理解していただく場でもあります。

さて、今年度も下半期を迎えています。小学校では、新学習指導要領が全面実施されました。低学年では週1時間の授業増となりました。中学校においても、来年度からの新学習指導要領の全面実施に向け、新教育課程の編成・学習指導計画の作成など、各中学校で待ったなしの準備が進められています。今年度の上半期を振り返り、佐渡市においても、学力の向上（特に算数・数学、英語）、不登校児童生徒の解消、特別支援教育の充実などが、喫緊の教育課題としてあげられます。

これから各小・中学校では、来年度に向けた教育課程の編成が始まります。佐渡市では、来年度、内海府、前浜、松ヶ崎の3小・中学校が同一校舎での連携を始めます。今こそ、職員一人一人が過去のやり方や経験則にとらわれることなく、全職員の柔軟な思考で、教育課程編成の重点化と精選、スクラップ&ビルドなどで、自校の子どもたちの目指す姿を描き、児童生徒の実態に合った大胆な改革・変革を進める時機です。教育課程の編成は、全職員の知恵を出し合い、英知を結集し、教職員のチームとしての協働・総合力が問われる緻密で時間のかかる仕事です。しかし、やりがいや充実感があります。5年先、10年先の自校の子どもたちの姿、そして佐渡の子どもたちの生きる姿を描き、職員同士が教育実践の夢を語り合い、お互いの資質や力量を高め合う「自校の教育課程の編成」を期待しています。